

# 18世紀のMoscopoleにおける アルーマニア方言

Dialectul aromân în secolul al  
XV III-lea la Moscopole

北村 一親  
Kazuchika KITAMURA

## 1. 序ならびに解説

本稿はΘεόδωρος'Αναστασίον Καβαλλιώτηςが著わした*Πρωτοπειρία παρά του σοφολογιώτατου και αιδεσιμωτάτου διδασκάλου* [...] 所収のルーマニア語アルーマニア方言に関する研究である。(以下*Πρωτοπειρία*と略す。)

### 1.1. アルーマニア人およびアルーマニア方言

アルーマニア人は自称 *armân*<sup>u</sup>または*rămân*<sup>u</sup>(複数形*armâni*, *rămâni*)と言い、周辺の民族からはドナウ川以北のルーマニア人と同じく*vlahi*などと呼ばれ、ギリシャ人は彼らを*Κουτσοβλάχοι*と呼び、アルバニア人は*rēmëri*または*çobani* セルビア人は*Цинцари*と呼ぶ。アルーマニア人全体で400000人乃至600000人おり、最も多いのがギリシャで200000人乃至350000人、アルバニアに70000人乃至100000人、ユーゴスラヴィアに30000人乃至50000人、ルーマニアには80000人乃至100000人で、そのうち50000人は*Dobrogea*に定着している。そしてブルガリアに10000人乃至15000人いる。<sup>(1)</sup>

ドナウ川以南におけるアルーマニア人にかんする最初の記録はギリシャ東部の*Χαλκιδική* 半島での7世紀のものである。<sup>(2)</sup>そしてマジャール人の侵入以前の8-10世紀に多数のアルーマニア人が移動し、特に10世紀にはその拡散が激しくなり、10-13世紀の*Θεσσαλία*の*Vlahia Mare*, *'Ακαρνανικά*や*Αιτωλία*の*Vlahia Mică*, *"Ηπειρος*の*Vlahia de Sus*などのアルーマニア人共同体が作られた。<sup>(3)</sup>

現在、彼らは多くのグループを形成している。主なものを挙げると、*Πίνδος* 山脈とその分派の*"Όλυμπος* 山脈のグループ、*Γράμμος* 山脈地方出身で各地に移住(特に*Θεσσαλονίκη*の方面へ)したグループ、アルバニアの*Korçë* 一帯や*Çamëri* 地方などにいる*Frashëri*出身のグループ、*Pogradec*から*Korçë*にかけてとユーゴスラヴィアの*Ohrid*, *Kruševo*, *Struga*などの*Voskopojë*(= *Moscopole*)出身のグループ、アルバニアの*Shkumbin*川と*Vjosë*川の間のアドリア海沿岸に住むグループなどである。

アルーマニア方言は五つの下位方言に分類することができ、大体において上述のアルーマニア人グループの分類と対応する。この五つの下位方言は7母音体系を有する*Pindos*方言(*Olympos*方言を含む)、*Grammos*方言の南部方言と6母音体系を有する*Frashëri*方言、*Moscopole*方言、*Myzeqeja*方言の北部方言に分けることもできる。<sup>(4)</sup>

### 1.2. Moscopole

*Moscopole*はアルバニアの南東に位置する村である。アルバニア語名を*Voskopojë*と言い、ギリシャ語で

Μοσχόπολιςと呼ばれる。Moscopoleはアルーマニア方言の名称であり、本稿ではこの呼び方に統一しておく。Korçëから北西へ18kmにあり、村の北10kmのところをDevoli川が流れる。アルバニアで出版された百科事典によると1160mの高地で、Shipskë、Krushovë、Gjergjevicëという村々と結びついており全人口は1880人、1330年からの古い村である。<sup>(5)</sup> 今日ではほとんど建物もない小さな村であるが、17-18世紀においてはアルバニアのアルーマニア人の商業・文化の最重要拠点であり、港湾都市のDurrësから約120km、Vlorëから95kmというように海から遠いにもかかわらずイタリアのVeneziaと盛んに交易をしていた。1750年頃は40000人の人口があり、そのうち35000人はアルーマニア人で50もの教会を有しアカデミーや公共図書館、印刷所、学校そして裕福な教会団体があった。<sup>(6)</sup> 栄華もそこまでで18世紀末には何度もトルコ人によって略奪され最後にAli Paşa率いる大軍に破壊されてMoscopoleの人々は四散してしまった。1905年7月15日にRomaを出発しアルバニアを旅行したC.N. Burileanuは当時のMoscopoleの240家族のうち140家族がアルーマニア人で残りの100家族がギリシャ正教徒のアルバニア人であると報告している。ちなみに当時のアルバニアでMoscopoleよりアルーマニア人家族数の多い町をBurileanuの一覧表から抜き出すと次のようになる。(単位は家族。)<sup>(7)</sup>

Berat	450 - 500
Korçë	400 - 500
Fier	300
Durrës	200
Plasë	} 150
Tiranë	
Kavajë	

### 1. 3. Πρωτοπειρία

アルーマニア方言で書かれた最初の資料は18世紀前半の *Inscriptia lui Nectarie Târpu* と *Inscriptia de pe vasul Simota* という二つの碑文で、前者は1731年の日付があり後者は日付こそないものの同時代に成立したことが判っている。<sup>(8)</sup> 続く文献が本稿で扱う Moscopole 出身のアルーマニア人 Θεόδωρος Ἀναστασίου Καβαλλιώτηςが著わした *Πρωτοπειρία* である。この本は散佚してしまったがこの原本を所有していたJohann ThunmannやGustav Meyerの記述によれば、<sup>(10)</sup> 全104ページの小型八つ折判で標題に続く3ページ目はギリシャ語による短かい序言、4ページ目は挿絵、5-12ページがギリシャ語入門、13-59ページが問題となる三言語の語彙集で各ページが三つの欄に分かれ、最初に現代ギリシャ語をアルファベット順に並べて2番目にそのアルーマニア方言訳、3番目にアルバニア語訳が記されている。<sup>(11)</sup> 60ページ目が挿絵、61ページにギリシャ語の祈り、62-67ページに聖書や教会の歴史からとった簡潔な格言、68-79ページが教義的および倫理的な短かい格言や祈り、80ページに三つの小さな木版画があり、81-92ページに教会の聖歌、(この92ページの下の方にアルーマニア方言の章句がある。) 93-94ページは数詞、95ページにアラビア数字、96ページに月の名前と計算が書かれている。Meyerの本はこれ以後のページが破りとられているが、Thunmannの本には104ページまでラテン語入門があり、さらに8ページ分の教会スラブ語入門が余分に付いている。出版は1770年でVeneziaのAntonio Bortoliによるものである。

この文献の語彙集の部分を研究したのは先にも少し触れた Johann Thunmann と Gustav Meyer、そして Franz Miklosich の 3 人である。まず Thunmann は *Πρωτοπειρία* の出版直後の 1774 年に *Untersuchungen über die Geschichte der östlichen europäischen Völker, I. (Leipzig)* 中の “Über die Geschichte und Sprache der Albaner und der Wlachen” にこの語彙集を複製した。<sup>(12)</sup> ただし語彙の項目番号は 1070 だが 900 番台が重複しているため実際の項目数は 1170 である。原典の *Πρωτοπειρία* の誤りなのか Thunmann の誤植なのかは不明である。さらに Thunmann はラテン語による見出しにして現代ギリシャ語の部分は脚注にしている。(ただし語彙の順序は現代ギリシャ語のアルファベット順のままである。) 次に Miklosich は 1882 年の *Rumunische [sic] Untersuchungen, I. Istro- und macedo-rumunische [sic] Sprachdenkmähler, “B. Macedo-rumunische [sic] Sprachdenkmähler.”* 前半部分に *Πρωτοπειρία* のアルーマニア方言の語彙をアルファベット順にならべ解説を付している。ただ惜しむらくは Thunmann の複製に頼ったため誤りをそのまま受け継いだことである。一方 Meyer は *Albanesische Studien, IV. Das griechisch-südrumänisch-albanesische Wortverzeichniss des Kavalliotis, 1895* において現代ギリシャ語のアルファベット順に並べてアルーマニア方言やアルバニア語に解説を施した。本稿では最も信頼のおける Meyer の項目番号に基いた。略号を伴わない数字のみのものはこの番号を示している。

## 2. Πρωτοπειρίαに見られるアルーマニア方言の一般的特徴

まず母音に関してアルーマニア方言に共通した特徴は語末の U の保存である。二子音結合の後で特に残る傾向がある。

άλμπου álbu 87; Mik. 11a; àlbu, DMR9a; Pap. 387b; άλβου, Κατσ. 68; drum. alb, DEDR8-9; DER176. < ALBUS.

λέμνου lémnou 678; Mik. 22a; lèmnou, DMR119a; Pap. 452b; drum. lemn, DEDR142; DER4781. < LIGNUM.

αλούπτου alúptu 717; Mik. 11a-b; drum. lupt, DEDR 151. < LUCTARI.

σέμνου sémnou 867; Mik. 34b; sèmnou, DMR186b; Pap. 485a; drum. semn, DEDR 252-253; DER 7680. < SIGNUM.

Capidan によると単子音の後では -u はゆれており、この環境の -u が発音されるのは Frashëri 系の方言の特色であるらしい。<sup>(13)</sup> *Πρωτοπειρία* に次の例がある。

σίνου sínu 455; Mik 34b; sin, DMR 190a; drum. sîn, DEDR 255; DER 7811. < SINUS.

またアルーマニア方言の特徴として語頭音添加の a- が挙げられる。これは k, g, p, f, v, s, z, j, ġ, h, m, n, l, r, i, ur

というような音の前に置かれるが r の前が圧倒的に多く、次に m, n, l, s の前の場合が多く生ずる。<sup>(14)</sup>

αρράντου arãdu 161; Mik. 12a; arãd<sup>ou</sup>, Κατσ. 69; arãd, Pap. 396a; arid, Pap. 397b-398a; drum. rîd, DEDR231; DER 7176. < RIDEO.

αρρούπου arũpu 672; Mik. 12b; arũp, Pap. 400a; drum. rump, DEDR 236, rup, DER 7290. < RUMPO.

次に子音に関しては唇音系列の音の口蓋化がおこる。

p > k'

κιάλε, κεάλε k'ale 215, 757, 1005; Mik. 18b, 19a; chiãli, DMR50b-51a; cheãle, chĩãle, Pap. 414b; drum. piele, DEDR204; DER6358. < PELLEM.

σκήκου sk'iku 928; Mik. 35a; schic, DMR183a; schic, Pap. 483a; drum. spic, DEDR259; DER8069. < SPICA.

κέπτου k'éptu 936; Mik. 19a; chépt, DMR50b; chèptu, Pap. 414b; drum. piept, DEDR204; DER6360. < PECTUS.<sup>(15)</sup>

m > n̄

νύκου n̄iku 617; Mik. 28a; n'ic, Pap. 472b; drum. mic, DEDR162-163; DER-5252. < MICA.

f > h'

χήγκου h'igu 642; Mik. 42b; hig, Pap. 444b; drum. infig; DER4407. < FIGO

χίλλου h'il'u 1036; Mik. 43a; hil'iu, DMR110a; hil'ũ, Pap. 444b; drum. fiu, DEDR-94; DER3413. < FILIUS.

χιάρε h'iare 1128; Mik. 43a; heãre, Pap. 444b; drum. fiere, DEDR93, DER3356. < FEL.

v > j

γίνυε jin'e 55; Mik. 14b; γίνυε, αγίνυε, Κατο. 72; drum. vie, DEDR313; DER9241. < VINEA.

γίσου jisu 692; Mik. 14b; v'is, Pap. 504; drum. vis, DER9302. < VISUM.

γέρμου jermu 904; Mik. 14a; drum. vierme, DER9243. < VERMIS.

これらの口蓋化には当該子音に後続する前舌高母音の影響が認められる。

ラテン語の閉鎖音k,gと流音lの結合はダコルーマニア方言においてlのヨッド化と、それによる先行子音の口蓋化が生ずるが、アルーマニア方言ではlが口蓋化するだけであり、ラテン語とダコルーマニア方言との中間段階を示している。

κλλιάε kl'ãe 420; Mik. 19b; cl'ãie, DMR66b; cl'eãie, Pap. 419b; drum. cheie, DEDR52; DER1697. < CLAVIS.

βέγκλλου végl'u 1090; Mik. 13b; avégl'ũ, Pap. 404a; drum. veghez, DEDR309-310; DER9201. < VIG(I)LO.

γκλλέτζου gl'étsu 499; Mik. 15a; gl'eț, Pap. 440b; drum. ghiața, DEDR108; DER3693. < GLACIES.

人称代名詞は2人称単数形において主格tuを用いずに対格の強形（絶対形）tine (tini)を主格として使うことが特徴的である。<sup>(16)</sup>

τύνε tine 278; Mik. 40b-41b; tini, DMR206b; tine, Pap. 493b.

DMR206bから主格に用いられた例と本来の対格の例を挙げておく。

tini nu vreĩ. = drum. tu nu vreĩ.

pri tîni nu te-aflăi = drum. pe tine nu te-am găsit.

アルーマニア方言では同様に1人称単数の人称代名詞の主格に対格強形(絶対形) mine (mini)を使うが  
Πρωτοπειρίαにおいては主格形が使われている。これはかなり希な用例である。<sup>(17)</sup>

έου έυ 247; Mik. 16a; eũ, Pap. 432b; drum. eu, DEDR85; DER3213. < EGO.

### 3. Πρωτοπειρίαにおけるアルーマニア方言の強勢母音体系

Πρωτοπειρίαで母体として使われるギリシャ文字による書法を分類して近代ギリシャ語の音価やアルバニア語を表記するために用いられた音価からアルーマニア方言の書法と音価の関係は次のように推定することができる。

書法	音価
a	[a]
ε	[e]
αι	
ι	[i]
η	
υ	
ει	
οι	[o]
ο	
ω	[u]
ου	
φ	[ə]

これに基づいて最小対立語を探すなどの音韻分析を行なった結果、次に示す強勢母音体系が得られた。(これは拙稿「Καβαλλιώτης, Πρωτοπειρίαにおけるアルーマニア方言の強勢母音体系」において分析したものである。)<sup>(18)</sup>

i	ə	u
e	o	
a		

最小対立をいくつか挙げておく。

[e] - [a] - [o]

μέλλιου	μέí'υ	412.
μάλλιου	μάί'υ	511.
μόλλιου	μόί'υ	627.

[i] – [a] – [o]			
	<i>ντζίκου</i>	<i>džiku</i>	531.
	<i>ντζάκου</i>	<i>džaku</i>	400.
	<i>ντζόκου</i>	<i>džoku</i>	716.
[i] – [e] – [u]			
	<i>μύρου</i>	<i>míru</i>	648.
	<i>μέρου</i>	<i>méru</i>	613.
	<i>μούρου</i>	<i>múru</i>	983.
[a] – [u]			
	<i>πάλλιον</i>	<i>pál'u</i>	104.
	<i>πούλλιου</i>	<i>púl'u</i>	815.
[o] – [u]			
	<i>πέρου</i>	<i>péru</i>	1023.
	<i>πάρου</i>	<i>páru</i>	723.
[a] – [ə]			
	<i>αρράντου</i>	<i>ařádu</i>	680.
	<i>αρράντου</i>	<i>ařádu</i>	161.
[o] – [ə]			
	<i>κότου</i>	<i>kótu</i>	12.
	<i>κάτου</i>	<i>kátu</i>	805.
[u] – [ə]			
	<i>λύνα</i>	<i>lünă</i>	1053.
	<i>λάνα</i>	<i>lănă</i>	573.

ここで得られた *Πρωτοπεριρία* の強勢母音体系は次に示すとおりアルーマニア方言の中でも北部方言の体系と一致する。<sup>(19)</sup>

北部方言			南部方言		
i	ə	u	i	ɨ	u
	e	o	e	ə	o
	a			a	

方言分化以前の共通ルーマニア語時代は上記の北部アルーマニア方言と同じ体系を有しており、<sup>(20)</sup> /ɨ/ はダコルーマニア方言と南部アルーマニア方言においてそれぞれ別個に後になって /ə/ から生じたものである。<sup>(21)</sup> この変化はルーマニア語全体を通じて見られる母音音色の狭め(ラテン語 /a, o, e/ がそれぞれルーマニア語 /ə, u, i/ になり、/ə/) がさらに /ɨ/ になる)<sup>(22)</sup> の流れに沿ったものである。 /ə/

が / 十 / になるのが顕現するのは共通ルーマニア語の分化の後しばらくたってからであるが方言分化の直前の時代にすでに異音として [十] が存在していたであろうということはダコルーマニア方言と南部アルーマニア方言との著しい類似から判断できる。

#### 4. Πρωτοπειρίαの語彙

全1170項目から重複分を差し引くと1094語になる。これを語源別、借用言語別に分類したものを次に示す。

語源・借用言語	語数	全体に対する割合(%)
ラテン語	617	56.4
ギリシャ語	263	24.0
トルコ語	73	6.7
スラブ語	62	5.7
アルバニア語	26	2.4
イタリア語	7	0.6
その他	46	4.2

なお「その他」の項にはダキア語やイリュリア語に遡る語彙や語源不明のものも含む。全体に対する割合は小数点以下第2位を四捨五入した。ここで企図したことは単なる語源の分類ではなくどのような言語から直接的に借用したかを調べることであるためたとえギリシャ語起源の語彙であってもアルバニア語を経由してアルーマニア方言に入ってきたものならばこれを「アルバニア語」の項目に入れた。このような方法をとることによって各語彙の持つ音の変遷を記述できるからである。しかしラテン語の多くやダキア語、イリュリア語など直接受け継いだものはやはり語源としておく。

スラブ語からの借用語は教会スラブ語が圧倒的に多く、わずかながらセルビア語、まれにブルガリア語、スロヴェニア語、クロアチア語などがあり地理的に考えても当然のことながらほとんど南スラブ語からの借用である。意外なのはイタリアのVeneziaと交易していたにしてはVenezia方言形に由来する語彙が見られずイタリア語からの借用語全体の数も決して大きくないということである。

以下に借用という観点から興味深い事例を見て行くことにする。

まずラテン語語幹などにスラブ語の接尾辞が付いている次のような語は言語の接触・混淆の点で注意をひく。

αούσου *aúšu* 168; Mik. 12a; αὐς(ῦ), Pap. 403b. Cf. DER536. AVUS + slav. -uš.

κατούσα *kátúša* 155; Mik. 18b. Cf. DER1564. CATTUS + slav. -uša.

τζανούσα *tsánúša* 921; Mik. 38b. Cf. DER1653. CINIS + slav. -uša.

τσερίτσα *tserítsa* 954; Mik. 39a. Cf. DER1661. CERRUS + slav. -itsa.

前三者はスラブ語の指小接尾辞 *-uš*, *-uša* が付いており、これらは現代ロシア語で男性名 Павел の愛称としての Павлуша や、дед 「祖父」に対する дедушка 「おじいさん」に見られる *-уш-* と同じである。<sup>(23)</sup> 最後の語にはスラブ語の指小接尾辞 *-itsa* が付いている。<sup>(24)</sup> これらの例とは反対にスラブ語語幹にラテン語系指小接尾辞が付いたものもある。

βαρραγκούτσου *vǎřǎgútsu* 194; Mik. 13b. Cf. DER9218. slav. ВЕРИГА 「足枷、鎖」 + ラテン語系指小接尾辞 *-utsu*。

スラブ語からの借用語だけではなくアルバニア語からの借用語にもラテン語系の接尾辞は付く。

σκιποάννε sk'ipoán'e 24; Mik. 35a. アルバニア語shqipe「鷲」+ラテン語系接尾辞-ŌNIA

アルーマニア方言の固有形とアルバニア語經由の借用語との二つの音形が見られる場合がある。ラテン語ctをアルーマニア方言はダコルーマニア方言と同じくptにしたのに対しアルバニア語は借用語としてftとして受け入れた。

αλύπτου alúptu 717; Mik. 11a; drum. lupt, DEDR151, DER4949. < LUCTOR.

λιούρτα l'úftǎ. 798, Mik. 22b. <アルバニア語luftë < LUCTA, Cf. EWAS 250.

Moscopole はアルバニア語のトスク方言域であるにもかかわらずゲグ方言からの借用語もある。

λεένε536, Mik. 22a. <アルバニア語ゲグ方言l'e-ni [sic] EWAS 234. Cf. トスク方言lagjin.

このように音形をみれば直接借用した言語が判断できる。

στάμπα stámbǎ 924; Mik. 36b; DMR195b.

これはダコルーマニア方言stampǎがイタリア語stampaに直接由来するのに反し、イタリア語を借用した現代ギリシャ語στάμπαを經由したものである。<sup>(25)</sup>下に示したδίσκουδίσκουは[d] > [δ]と変化した中世以降のギリシャ語を借用したものであるがπάντεπάδεの方はかなり古い時期にギリシャ語から入ったものであり、δが摩擦音化していない。

δίσκου δίσκου 230; Mik. 16a; DMR88a.<中世以降のギリシャ語δίσκος, Cf. EAKN85b; DER2974.

πάντε Páde 364; Mik. 31a; pǎdi, DMR 161a; páde, Κατσ. 83; pǎde, Pap. 474a.

<ギリシャ語πέδον.

最後にΠρωτοπειρίαに見られる音韻面でのアルバニア語の強い影響の一例を挙げておく。

αρρίκλλιου aríkl'iu 654; Mik. 12b. < RENICULUS.

ασστέρρου aštěru 950; Mik. 13a; aštěrn, Pap. 403a; drum. aštěrn. < STERNO.

σστουρρουτέντζου štuřutědzu 1082; Mik. 38b; drum. strǎnut, DER8242. < STERNUTO.

これらの語はアルバニア語の影響でrn>řとなつている。<sup>(26)</sup>

<注>

1. 数字はSaramandu (1984) p.423による。
2. Capidan (1932) p.26.
3. Ruffini (1941) p.6, Capidan (1932) p.7, Saramandu (1984) p.424.
4. Ibid., p.427の分類による。
5. Fjalor enciklopedik shqiptar, f.11 75b.
6. Ruffini (1959) p.1, (1941) p.4.
7. Burileanu (1912) p.129, p.391 seq.
8. Saramandu (1984) p.425.
9. 完全な標題はMeyer (1895) S.3にある。



10. Thunmann (1774) S.178–179, Meyer (1895) S.3–4.
11. Tagliavini (1981) p.550でラテン語、アルーマニア方言、アルバニア語の三言語とあるのは誤りである。
12. 今回は“Über die Geschichte und Sprache der Albaner und der Wlachen.”の部分のみを複製したH. Haarmannのものを使った。
13. Capidan (1932) p.285, 287.
14. *Ibid.*, p.224.
15. このP>Kの変化はダコルーマニア方言でも生じている。例えばモルダヴィア方言では *piept* に対し *κ''επτ, τ''επτ* などの形が見られる。(κ''=やや硬い口蓋化した[K]、τ''=無声硬口蓋閉鎖音 [c].) *АЛМ, I, 239*
16. Capidan (1932) p.140, 536.
17. *Ibid.*, p.408, 536.
18. 北村 (1987).
19. Saramandu (1984) p.428. 表記法は北村が変更した。
20. Rosetti (1966) p.63.
21. /ɨ/ の起源は Nandris (1963)p.54, Rosetti (1985)p.187 に詳しい。ただし前者の g 項の i と後者の第 8 項の i は ɨ の誤りである。よって後者のトルコ語は *katır* が正しい形である。
22. *Ibid.*, p.184.
23. Capidan (1925) p.21, Rosetti (1964) p.81.
24. Capidan (1925) p.21, Rosetti (1964) p.79.
25. ЕЛКН 337a, DER8127 mm 参照。
26. Weigand (1910) S.209.

<略語及び参考文献一覧>

АЛМ = Атласул лингвистик молдовенеск, I. Кишнэу, 1968.

arum. = アルーマニア方言

Burileanu, C.N. (1912) *I Romeni di Albania*. Bologna.

Capidan, Th. (1925) *Elementul slav în dialectul aromân*. București.

(1932) *Aromânii, dialectul aromân*. București.

DEDR = A. de Cihac, *Dictionnaire d'étymologie daco-romane*. Francfort s/M, 1870.

DER = A. Cioranescu, *Diccionario etimológico rumano*. Tenerife, 1958–1966.

DMR = I. Dalametra, *Dicționar macedo-român*. București, 1906.

drum.=ダコルーマニア方言

ЕЛКН = N. П. 'Ανδριώτης, 'Ετυμολογικό λεξικό τῆς κοινῆς νεοελληνικῆς. Θεσσαλονίκη, 1983<sup>3</sup>.

EWAS = G. Meyer, *Etymologisches Wörterbuch der albanesischen Sprache*. 1891 (Leipzig, Reprint, 1982).

*Fjalor enciklopedik shqiptar*. Tiranë, 1985.

Καρσ. = T. M. Κατσουγιάννης, *Περὶ τῶν Βλάχων τῶν ἑλληνικῶν χωρῶν*, Α'. Θεσσαλονίκη, 1964.

北村一親 (1987) 「Καβαλλιώτης, Πρωτοπειρία におけるアルーマニア方言の強勢母音体系」  
(名古屋大学研究経過報告書)

Meyer, G. (1895) *Albanesische Studien*, IV. Wien.

Mik. = F. Miklosich, *Rumunische Untersuchungen*, I, B. Wien, 1882.

Nandris, O. (1963) *Phonétique historique du roumain*. Paris.

Pap. = T. Papahagi, *Antologie aromăneasă* [sic] București, 1922.

Rosetti, Al. (1964) *Istoria limbii române*, III. București, ediția a V-a.

(1966) *Istoria limbii române*, IV (ed. a II-a), V, VI (ed. a IV-a). București.

(1985) *La linguistique balkanique*. București.

Ruffini, M. (1941) "I Romeni d'Albania," *La rassegna italo-romena*, Milano (Estratto).

(1959) "Un Centro aromeno d'Albania: Moscopoli," *Noul album macedo-român*, Freiburg  
(Extras).

Saramandu, N. (1984) "Aromăna," *Tratat de dialectologie românească*. Craiova, pp.423–476.  
slav. = スラブ語

Tagliavini, C. (1981) *Le Origini delle lingue neolatine*. Bologna, sesta ed., VI ristampa.

Thunmann, J. (1774) "Über die Geschichte und Sprache der Albaner und der Wlachen." (Nachdruck der Ausgabe *Untersuchungen über die Geschichte der östlichen europäischen Völker*, I, S. 169–366, hrsg. von H. Haarmann, Hamburg, 1976).

Weigand, G. (1910) "Die Aromunen in Nordalbanien," *Sechszehnter Jahresbericht des Instituts für rumänische Sprache zu Leipzig*. Leipzig, S. 193–212.